

# ころころの森にかける思い

—子育て支援へのかかわりの個人史から—

白梅学園大学・短期大学学長

東村山子育て総合支援センター長

汐見 稔幸

1

私はまだうんと若いときから、親の子育てを応援する仕事にかかわってきました。

きっかけは、国立市の教育講座の講師をしてくれたいかという依頼を受けたことでした。

当時私は東大の教育学研究科という大学院の博士課程に在籍していた大学院生でした。専攻は教育哲学で、その限り理念的で抽象的な学問をする場に身を置いていました。そうしながら、この学問が実際の教育に深くコミットできる道を探っていたのです。大学紛争世代である私は、学問が実際に役立つというこの意味

をあれこれ考えざるを得ない状況で研究者になる道を歩み始めていたわけです。

当時、国立市の公民館には、伊藤雅子さんという著名な社会教育者がいて、幼い子を育てるということの意味や親のかかわりの在り方、特に親が子どもを人に預けて自ら学ぶということの意味や正当性をめぐって育児中の親たちと議論を交わしていました。

その公民館で、子どもがもう少し大きい親たちを集めて、これからの教育をあれこれ考える講座を開きたいということ、当時の公民館の職員だった山崎健さんが相談しに來られたのです。どういういきさつで私

のところに来られたか忘れましたが、山崎さんの誘いかけに乗って、私は国立市で、教育講座を始めました。年間40回程度続ける、息の長い講座でした。その中身を参加者と相談しながら決め、実際の運営を一切任されたのです。

当時、学校や教育が大きく変わり始めていました。小学生が多感さを漂わせる詩をたくさん残して自死するというショックな事件がおこり、全国で家庭内暴力が勃発し始めていました。開成高校2年生の生徒が激しい家庭内暴力を起こし、両親はもう耐えられないと、二人でわが子の首を絞めて殺してしまうという痛ましい事件が起こったのもこの頃でした。早稲田高等学院の高1生が、祖母を殺害し自らも飛び降り自殺した事件、川崎の浪人生が酒を飲み両親を金属バットで殴り殺した事件……と、作家の想像力も及ばない悲惨な事件が相次ぎ、中学校は荒れに荒れ始めていました。私は国立の親たちと、こうした事件を一つ一つたどりながら、どうしてこういうことが起こるのか、私たちはどうすればいいのかなどを探り始めました。当時『父よ！母よ！』（上、下）等のルポを書き、こうした事件の背後にあるものを鋭く追いかけていた共同通信社の斎藤茂男記者を呼んで、その話を聞いたのも、講座の中でした。以来、斎藤さんとは子どもと教育について折に触れ話しあう関係になり、ガンで亡くなるま

でその関係が続きました。（『こうすれば学校は変わる』（大月書店）という学校関係者による座談会をベースとした本があるのですが、座談会のメンバーの一人として斎藤さんに参加してもらい、積極的に発言をしてもいました。しかしテーパー起こしがおわり、ゲラにして朱を入れてもらおうと連絡したら、すでに病院に入院したあとでした。斎藤さんはこの病院から生きた姿で戻ってくることはありませんでした。原稿はご家族の許可を得て私が斎藤さんの発言に必要最低限の赤を入れて出版させていただきました。この本が斎藤さんのかかわった最後の本ということになると思います。）

こうしたことを国立の親たちと勉強することを通じて、私は、教育をただしていくには親が教育についてワイワイ話し合える場を持たないといけない、それが可能な社会を本気でつくらなければならぬ、と痛感するようになりました。それまで、学校の教師たちと議論してきたのですが、それだけでは学校も教育も根本的には変わらないということに気づき始めていたのです。

国立での子育てと教育を内容とする講座は確か2年か3年続きましたが、同じようなことを三鷹市でも要請されましたし、立川市でも行いました。三鷹は通年で、立川での講座も20回程度続くもので、すべて私が一人で参加者と相談しながら企画し運営しました。内

容も同じように、教育と子育ての現代的問題を考えあうものでした。今ではこうした長期に亘って一人が担当する講座はないようですが、当時は公民館活動が活発化し始めたときで、職員も、誰に依頼していいのか、それほど情報がなかったのかも知れません。私は他にも品川区や中野区、江東区等でもう少し短期の講座を担っていました。1回だけというのなら、首都圏のほとんどの自治体の公民館に話しに行ったと思います。国分寺市の公民館にもよく行きましたし、大宮や横浜、川崎なども頻繁に通いました。

講座が終了すると、参加者たちは自主的な教育サークルを組織し、そのあと自分たちで勉強会を続けたり、地域での種々の教育活動に参加していきました。国立ではしおみ会という名前もついていました。立川で講座に参加していた参加者の一部は、同じ公民館で開催されていたエミールを読む会にも出ていました。この勉強会の講師をされていたのが、わが白梅学園の学長だった田中未来先生でした。私は当時、先生に直接お目にかかる機会はありませんでしたが、参加者の話を通じて、その優しい態度、熱心な様子だけは聞き及んでいました。

## 2

やがて、こうした社会教育的な学びは、子育てを始

めたばかりの若い親を対象とするものが増えていきます。また保健所でいわゆる両親学級が始まります。両親学級とは、母親教室とは異なり、これから親になる父親にも来てもらい、沐浴の練習、病気についての基礎知識、育児の基本情報などを学んでもらうものです。保健所や保健センターが主催していました。私は大田区、品川区、江東区等の保健所が主催する両親学級の講師を長くつとめました。

私は、発達的な人間学（教育人間学）ということをしてテーマにしていた関係もあって、乳幼児の発達についての理論勉強はわりとしている方でした。その延長で、保育にも関心を持つようになり、育児には強い関心を持つようになっていきました。自分の子どもを育てなくてなくてはならなくなったということも当然背景にあります。

1980年代の後半から90年代にかけて、学校では不登校の生徒が急増し、またいじめが広がって学校への不安感が拡大していました。バブル経済の中で、父親不在の家族が深刻な問題を抱え始めていました。産業構造の転換を図るといふ名目で育児産業に手を出す企業も増え、早期教育を売り物にする教育産業もめだつてきました。そういう中で、子どもをおかしくしてしまう家庭が跡を絶たなくなり、子どもがうまく育たないと嘆く母親の増大への対応ということが急に増え

てきて、そうした風潮をどう批判し克服するか、悩んでいました。

『このままでいいのか超早期教育』（大月書店）という本を書いたのはそういうことがあったからでした。当時早期教育を売り物にする業者が雨後の竹の子のように増え、カウンセラーのところにはそれによっておかしくなった子どもがたくさん連れてこられるようになっていました。仕方なく、私はまだ理論的に深まりがないと思いつつも、警告をしなくてはという思いでこの本を出したのです。多分、この本が日本で早期教育に警告を発した最初の本だったと思います。そのせいか、その頃テレビ等のマスコミでもこの問題が取り上げられるようになりますが、大体が私のところ取材に来ていました。

バブル経済が崩壊したあと、子どもと親を取り巻く文化がまた大きく変わっていきました。映画などのビデオテープの貸し出し代金が一日100円程度になり、子どもでも簡単に借りられるようになりました。ファミコンのようなテレビゲームが広がり、家の中で何時間も遊ぶということが可能になっていきました。インターネットが始まったのは1991年です。

家庭にパソコンがどんどん入り始めました。そうしたことに反比例するかのように、子どもの外遊びがまた減っていききました。そしてバブル経済崩壊後の不安

と不景気で、親に不安が拡大し、子育てにゆとりをなくす親が急増していきました。国が兎相に持ち込まれた虐待件数を発表するようになったのはやはり1990年頃からですが、この頃から、育児と親の暴力が密接不可分になりつつあることが推測されることが多くなりました。

こうした現状に心を痛めた人たちは、孤立した母親をなくさなければならぬと子育てサークルをつくることをあちこちで呼びかけるようになりました。人気のあった育児雑誌『プチタンファン』が「公園デビュー」という語をつくって広めたのもこの頃です。子どもが少し大きくなったら、公園に行つて子どもを遊ばせ、あわせて親同士が友達になって一緒に子育てできるようにしよう、という呼びかけの意味でつくった語です。

そのため行政も、育児講座のような勉強会をまず開き、数回勉強したあと参加者同士でサークルのようなものをつくり、そのあと一緒に子育てするようになると働きかけようとするのが急速に増えていきました。1990年代の中頃には、国が少子化問題を取り上げ始め、親の子育てを応援するようになるという施策をはじめ、親の呼びかけに拍車をかけたように思います。

こうして、育児をしている親特に母親に育児サーク

ルをつくろうと呼びかけるような子育て支援が本格化していったのですが、広がっていくと同時に新たな問題が持ち上がるようになっていきました。それは、知らない者同士が集まって友達になり、一緒に子育てをしよう…といっても、そもそも知らない者同士が友達になるには、相当の気遣いとエネルギーが必要ですし、しかもこのころ母親になってきた人には、学校でのいじめの日常化という体験の持ち主が増えてきて、ざっくばらんな人間関係をつくるのが苦手になってきていました。学校時代、自分をどうすれば守れるのかということに腐心し、他者と本音の関係をつくることをあまり訓練されなかった世代です。

そのため、育児サークルに参加するのに過剰に気遣い、参加したら参加したで、知らない人にどう距離を取ったらいいか悩んだりするということが増えてきました。すでにできていたサークルに新参者が入っていくと、感覚がちがうといって、その人を密かにいじめることもあちこちで起こり始めていました。家のポストに猫の死骸を入れたり、怪電話をかけたたり、というような信じがたいことが報告され始めたのです。やり方を見ていると、学校でのいじめと同型であることに、奇妙に感心したことを覚えています。

東京の文京区の音羽地区で、育児サークルの中心メンバーの子どもを幼稚園の帰りにさらって殺してしま

ったという悲惨な事件が起こったのもこの頃でした。犯人はあとからこのサークルに加わったおとなしい母親でした。特に恨みがあったわけではなく、そのサークルの人間関係を続けるのに疲れたのが原因としか思えない事件でした。

私はそうした流れを見ていて、育児サークルをつくるうという育児支援は、無理がある。そういうことが得意な人にはいいが、人間関係づくりに気を遣う人、知らない人とざっくばらんな関係をつくるのが得意でない人等にとっては、育児をするには苦手で困難な課題をこなさねばならない、と映ってしまうのではないか、という論を張ることにしました。日経新聞に送った原稿を寄せたこともあります。それよりも、誰もが気軽に来てワイワイできる子育ての広場のようなところをつくっていくことが大事ではないかと訴えることにしたのです。

### 3

ちょうど同じ頃に私の大学院の先輩の小出まみさんが、カナダの子育て支援のやり方を紹介し始めました。カナダは移民が多く、多文化ですから、伝統的な方法に依拠するということができません。みんなで支え合う合理的な方法を編み出し続けることがいわば伝統をつくることになるのです。

そのカナダにはドロップインセンターというものがたくさんつくられているということを、小出さんから教わりました。ここは気軽に子育て世代が子連れで訪れることのできる場で、訓練された世話役の人がいて自由に相談に応じてくれ、絵本コーナーやおもちゃ棚があつて、読み聞かせやおもちゃでの遊び方を教えてくれる人もいる。音楽室があるところもあつてリトミックなどを教えてくれる人もいる。ともかく義務が少なくいつでも自由に子連れで参加できる。ほっとするスペースだということです。

日本でも武蔵野市の0123吉祥寺や、それをモデルにした子ども家庭支援センターみずべ等ができてはじめていました。ちなみに「子ども家庭支援センター」というのは、東京都独自の子育て支援センターで、私が都の児童福祉審議会の委員だったときに、みんなで構想してつったものです。今日本社会事業大学の学長をしている大橋さんたちとワイワイ議論して案をつくったことをよく覚えています。私たちの計画では、24時間稼働の施設で、虐待にも対応し、子どもたちも運営委員に加わるといふ、ある意味画期的なものでした。これを人口十万人に1カ所つくることを提言したので

す。  
それはともかく、0123吉祥寺やみずべは、カナダのドロップインセンターに近い運営がなされ、その

人氣は急速に高まっていました。つくられてしばらくした頃、私は訪問して考えを伺ったりしたのですが、たとえば0123吉祥寺の森下さんの考えは実にしっかりしていました。お母さん、ときにはお父さんが子連れできて、特に向こうから依頼がない限り、特別なことはこちらからしない。参加者が自由に動き、関係をつくり、自分で学んでいくことを期待している。その手伝いをするのが職員で、そのため、お母さんたちの動きをよく観察するのが職員が一番大事な仕事になっている、ということです。相談もあれこれアドバイスするよりは、お母さん、お父さんに考えて判断してもらおうの手伝うようにしているということでした。

やがて、国の方もこうした施設の大事さに気づくようになり、厚労省の保育課ではなく少子化対策企画室というところが、子育て世代の親が自由に集ってワイワイする場をつくるという企画に援助をされました。これが「つどいの広場」です。詳しくは省きますが、横浜の「びーのびー」や新座の「るーえん」等、新しいタイプの子育て支援施設がモデルとなって急速に広がっていきました。名古屋市の「まめっこ」札幌市の「かざぐるま」等、全国のあちこちで、とてもしっかりとしたいい仕事を始めました。

子育て支援が、サークル型からひろば型に移っていきなかに応じて、今度はその質の評価が問題となってきた

した。正直に言いますと、行政が施設をつくり、行政職員を派遣して運営しているところは、あまり評判がいいとは言えないところが当初多かったと思います。民間で、あるいは個人でつくった方が心がこもったよい支援活動をしているところが多かったように思うのです。考えてみれば当然かも知れません。民間のものは自分たちがつくりたくてつくっているわけですから、運営に慣れてくればそれなりのものになる確率が高いはずです。行政がつくったものは、職員は希望してやっていると限りませんので、どうしても心のこもらない支援活動になりがちです。東京の江戸川区にあるNPO法人が行っている東京ペーテルのひろば活動などは、民間あるいは個人が志を持って行うがゆえの水準の高さを示す典型のように思われます。詳しくは書きませんが、利用者の評価の極めて高いところには、民間立のものが多かったことは事実なのです。

しかし、山形市や北九州市あるいは大垣市や大津市など、行政が責任を持ってひろば的な活動をしているところでも、少しずつレベルの高いものが出てきています。見学させていただいて、うらやましく感じるものも増えていきます。行政が民間の志のある人たちと協同するようになってきているからだと思います。

紙数がなくなりましたので、これ以上は書けません

が、私が「ころころの森」にかける思いというのは、こうした私自身の子育て支援活動30年の発展上にあります。行政が枠をつくり、その内容を民間で埋めていく、そこに市民、当事者が密接にかかわっていき協同の実際を創造していく、これが新しい関係の在り方だと思っていますし、協同の仕組みだと思っています。ただ、これも詳述できませんが、子育て支援というのは、親の自己決定力を高めていくだけでなく、子ども支援・家族支援ともならなくてはいけませんし、さらには市民参画型社会づくり、そして持続可能な社会づくりの一環・一翼にもならなくてはいけないと思っています。そう考えると、現在の「ころころの森」の取組は、順調にスタートしてはいますが、ひろば型事業が始まり、相談や各種イベントが発したほんのスタート段階というに過ぎません。これから本モノになりうるか、未来を創造するモデルになりうるのかが問われていくのだと思います。チャレンジシ学ばねばならないことはたくさんあるといわねばなりません。ぜひ温かく見守り支援していただければと願っています。